



シーマンシップ、
私の見解

青木 洋

1970年代に自作艇で世界一周
青木ヨットスクール校長

シーマンシップを 構成する四つの要素

青木 洋さんが最初にシーマンシップという言葉について思いを巡らせたのは、アメリカでASA(アメリカセーリング協会)のインストラクターコースを受講していたことだという。

「講義の中で、やたらと『シーマンシップ』という言葉が出てきて……。当時は私もシーマンシップという言葉が『海の男の心意気』といったような精神的な意味として受け止めていたので、講義の内容がよく分からなかったんです。『どういう意味なんだ?』と質問したら、純粹

にシーマンとしての技術を指す言葉らしいということが分かって、腑に落ちたという経験をしたんです(青木さん)

ASAでインストラクターの資格を取得し、日本国内でヨットスクールを始めた青木さんは、シーマンシップという言葉に精神的な意味合いを込めるという日本独特の風潮が、これからヨットを始めようとするニューカマーにとって大きな壁となっていると指摘する。

「シーマンシップというものが崇高な精神であるということになると、それはおいそれと手に入るものではなく、ますますよね。でも、純粹に技術であるとするな

ら、知識と経験を積み上げていくことで誰でも手に入れることができるはずのものなんです」

青木さんは、海に携わる人間が持つべき技術の集合体であるシーマンシップという概念は、大きく分けて四つの要素から構成されると考えている。

「一つめがタッキングやジャイビング、セールトリムなどの『セーリング』、二つめが海図を読んだり天測などの『ナビゲーション』、三つめが海の天候の知識である『マリンウエザー』、そして最後にフネを修理したり必要な艦装を装備する『メンテナンス』。これら四つの知識と技術の総合体がシーマンシップだと考えています」

日本のベテランセーラーの間では、「スクールなんかでシーマンシップなど身に付かない」という考え方が、いまだに幅をきかせている風潮があるが、どんな初心者でもヨットやボートに乗った瞬間から、フネを操る技術や知識のほんの一部は経験として身に付いている

「シーマンシップを究めることは不可能。命のある限り、経験を積み重ねていくしかない」



落水者救助の技術を広く共有するため、青木ヨットスクールのインストラクターたちが集まった研修会の様子

わけで、極めて低いレベルではあるものの、それは「シーマンシップ」と呼ぶべき概念であると青木さんは言う。

「日本のヨット界は徒弟制度のような形で技術の伝承が行われてきたという経緯があって、その中でシーマンシップが求道的な概念に置き換えられてしまったのかもしれない。私は徒弟制度のような技術伝承を否定するわけではありません。スポーツの世界でも、徒弟制度的なやり方でオリンピックのメダルを獲ったケースもありますからね。でも、それは特別な人が特別なレベルで行う話であって、すべての人がそうした方法

で取り組まなければいけないとは思いません」

シーマンシップは、 究めることはできない

「ヨットレースなんかで一番になった人が、自分こそは最も優れたセーラーであるかのように自慢げに振る舞うことがありますよね。クルーで乗っていただけなのに居丈高に振る舞った(笑)。もちろん、人より速く走るというセーリング技術においては一番であることは認めるべきだし、敬意を払うべきだけれども、それは幅広いシーマンシップという概念のほんの一部でしかないというも、また事実です」

シーマンシップという概念を語る際に、どうも旗色が悪くなってしまうのがレース派であるが、高いシーマンシップを誇りにするクルージング派も、レースの成績を自慢するレース派を鏡に映した姿に過ぎないと青木さんは言う。

「よく、レースの成績を自慢するレース派に対して『オマエは八丈島に行ったことがあるのか?』とか、『天測ができるのか?』と揶揄するクルージング派がいますが、それもまたシーマンシップを構成する一部の能力に過ぎません。どこかコンプレックスがあるものだから、速く走るというシーマンシップに対して素

直に敬意を払うことができないんです。かつて自分がそうだったからよく分かるんです(笑)。シーマンシップとは、それほど幅の広い概念なんです」

本来は資格や身分などを表すshipという接尾語だが、seaman(=海を航海する人間)という概念自体がきわめて幅広く奥の深い体系を有しているため、『心意気』のような精神的な概念も取り込まれてしまいがちなかもしれない。

「でも、『溺れている人がいたら、何をさておいても救助する』というも、立派なシーマンシップですよね。精神論に帰すこともできますが、溺れていたらお互いに助け合うというのは、海を航海する人間にとってきわめて合理的なシステム。荒れた海で溺れる人を救助するというのは、技術的な裏付けがなくてはできないことですから、セーリング航海の技術に含まれるシーマンシップと考えることもできますよね」

ここまで幅を広げてしまうと、我々日本のセーラーが誤解して受け止めている「シーマンシップ」像も、あなたが間違っていないということになってくる。

「私はまったく否定しません。シーマンシップのレベルが上がってくれば、当然精神的な部分にまで及んでくるはず。ただ、受け止め方の順序が逆なんじゃないかということ。先に挙げた四つの要素についても、現時点での私のレベルで考えるシーマンシップの構成要素だというだけで、私よりはるかに高いレベルの経験と知識を有するセーラーから見たら、『いや、五つめの要素としてがあるだろ』ということになるかもしれないし、それを私は否定しません。正解がないというのが、この世界の唯一の真理だと考えていますから。シーマンシップについても、究めることは不可能だと思います。命のある限り、経験を積み重ねていくしかないんじゃないでしょうか」

(レポート・写真 = 松本和久)

青木 洋 あおき 洋

1949年、大阪府生まれ。1971年から3年2カ月かけて、自作の6.3m木造ヨット「信天翁二世」で単独世界一周。現在は、アメリカセーリング協会の資格プログラムを採り入れた、青木ヨットスクールを主宰。全国各地でスクールを開講し、これまでに約 1000人の修了者を輩出している

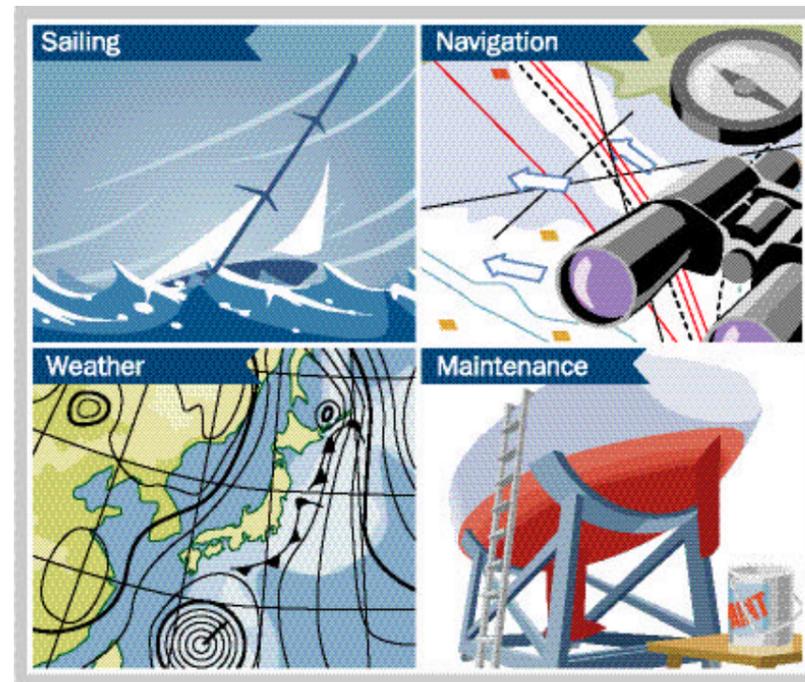


illustration by Ryoichi Kura